Osaka University Knowledge Archive

Title	Knee Extensor Weakness Potently Predicts Postoperative Outcomes in Older Gastrointestinal Cancer Patients
Author(s)	安延, 由紀子
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/93035
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　名 Name	安延　由紀子
論文題名 Title	Knee Extensor Weakness Potently Predicts Postoperative Outcomes in Older Gastrointestinal Cancer Patients （高齢消化器癌患者において、膝関節伸展筋力低下は術後の転帰を強く予測する）

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

握力によって評価される筋力低下は、高齢のがん患者の術後死亡率を予測することが示されている。下肢筋力は身体能力をよく反映するため、高齢の消化器がん患者において、膝下伸展筋力が握力よりも術後死亡率を予測するかどうかを検討した。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

デザイン：

単一施設における前向き観察研究

設定と参加者：

2012年4月から2019年4月までに握力と等尺性膝伸展筋力の術前評価を受けた65歳以上の消化器がん患者813人（79.0±4.2歳、男性66.5%）を対象とした。

方法：

研究参加者は、術後死亡率について前向きにフォローアップされた。筋力低下は、握力または膝伸展筋力の最低四分位値とした（それぞれGS-筋力低下、KS-筋力低下）。

結果：

研究参加者のうち、176名の患者が中央値716日の追跡期間中に死亡した。Kaplan-Meier解析では、GS-筋力低下とKS-筋力低下の両方を有する患者は、筋力低下のない患者よりも生存率が低いことが判明した。予想通り、内視鏡手術と比較して臨床病期が高いこと、腹部・胸部手術は全死亡率の上昇と関連していた。さらに、Cox比例ハザードモデルで性別、肥満度、がんステージ、手術方法、手術部位を調整した結果、GS筋力低下ではなく、KS筋力低下が独立した予後因子であることがわかった。

〔総　括(Conclusion)〕

高齢の消化器がん患者において、膝伸展筋力に基づく筋力低下は、握力に基づく筋力低下よりも術後予後の良い予測因子となりうる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）
安延　由紀子

		（職）	氏　　名	
論文審査担当者	主　査	大阪大学教授	猪阪 善隆	署名
	副　査	大阪大学教授	中田 研	署名
	副　査	大阪大学教授	望月 泰樹	署名

論文審査の結果の要旨

がんはわが国の死亡原因の第1位であり、国民の生命および健康にとって重大な問題である。外科治療は、消化器がんを根治することができる一方、リスクも高い。また、消化器外科手術を受ける高齢者は約8割を占め、増加傾向にある。高齢者では、特有の治療法やケアが必要となるケースも多い。しかし、その根拠となるエビデンスは不足している。老年・総合内科学では、消化器外科と共同で、消化器がんの手術を受ける高齢者に対して身体機能評価を行い、術式の決定や合併症等のリスク判定を行っている。同時に、倫理審査委員会の承認を受けてデータベースを構築し、高齢者消化器がん治療のエビデンスを確立するための研究を行っている。
本研究は、2012年から2019年の間に、術前の身体機能評価を行った高齢者消化器系がん症例813名を対象に、術前の身体機能が術後の生命予後に及ぼす影響を解析したものである。その結果、身体機能、特に膝伸展筋力は、がんの種類やステージ、年齢と独立して、生命予後を強く予測することが明らかとなった。
本研究により、高齢者消化器がん症例では、術前の筋力が重要であることが示された。今後さらに、術後合併症を減らし、生活の質を維持するための治療方法について研究を進めるが、本研究はそのための礎となるものであり、学位に値すると認める。